

ボックス理論における日本語再帰代名詞の分析

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2023-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小町, 将之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000054

ボックス理論における日本語再帰代名詞の分析¹

小 町 将 之

1. はじめに

Chomsky (2021) は、コピー関係を認めるプロセス (コピー形成) を構造構築操作としての併合から切り離し、第三要因による根拠づけを与えている。Chomsky (2023) は、このコピー形成がより自然な形で組み込まれる言語計算のモデルを追求する中で、連続循環的移動を構造構築操作から切り離して捉えるボックス理論の枠組みを提示した。この枠組みの影響範囲は甚大で、様々な研究課題について検証が必要である。本論文では、このボックス理論の枠組みにおいて、日本語の再帰代名詞「自分」がもつ主語指向性と長距離性 (Katada 1993) をどのように捉えられるか、その分析を素描し、そのために必要な補助的仮説群を明示的に特徴づける。

本論文の構成は以下の通りである。第2節ではChomsky (2023) の提案するボックス理論を概観し、第3節で分析の対象となる日本語の再帰代名詞「自分」が有する主語指向性と長距離性を、「自分自身」や「彼自身」との対比 (Katada (1993)) において整理する。第4節では、ボックス理論の枠組みでの新しい分析を素描しながら、検討すべき課題などを明らかにする。第5節はまとめである。

2. ボックス理論 (Chomsky 2023)

Chomsky (2023) は、思考を生み出す計算システムとしての内的言語 (I-language) を、強い極小主義のテーゼ (Strong Minimalist Thesis: SMT) に適う形で説明す

¹ 本論文はJSPS科研費20K00678の研究成果の一部であり、論文の内容の一部は2023年6月に日本言語学会第166回大会 (於・専修大学) ワークショップ「Copy Formationが織りなす諸現象の表出: Enabling Functionの役割を中心に」において、大宗純氏と共同発表したもの一部を含みます。宗像孝氏、大宗純氏との議論において学ぶことが多くありました。ここに謝意を表します。

る試みの中で、ボックス理論を提案した。このモデルでは、構造構築操作である併合は、項 (A) 位置の生成に関与して Θ 関係を構築する外的併合 (External Merge: EM) と、非項 (A') 位置の性質に関与する内的併合 (Internal Merge: IM) の役割が分けられており、IMによってフェイズの先端へ移動した要素は「ボックス」に投入され²、構造構築の過程からは分離される。このため、一度ボックスに入れられた要素は、それ以上IMによる操作の対象とはならず、それゆえに連続循環的な移動を考えることはできない。フェイズを超えた解釈関係は、それ以降の構造に導入されるフェイズ主要部が、ボックス内の要素にアクセスを保証されることで捉えられる。

この枠組みを採用すると、Chomsky (2021) で提案されたコピー形成の仮定のもとで、以下の話題化された文をうまく説明できる。(1) では、いわゆる束縛条件Cの効果によって、 $Bill_i$ と $Bill_j$ は別人物として理解される。

(1) $Bill_i, Bill_j$ met yesterday.

この文の派生をChomsky (2021) の仮定する標準的なモデルで考えると、(2) のようになる。

(2) $\{Bill_4, C, \{Bill_3, \{v^*P\} Bill_2, \{met\} Bill_1\} \}$

目的語としてEMされた $Bill_1$ は、 v^*P の先端にIMされ ($Bill_2$)、連続循環的にCPの先端にIMされる ($Bill_4$)。主語の $Bill_3$ は、Cが導入されるより前に、 v^*P の外項としてEMされる。この構造にコピー形成が適用されると、構造的に同一な $Bill$ はいずれもコピー関係にあると解釈され、特に、 $Bill_4$ と $Bill_3$ の間には誤ったコピー関係が認められ、その結果、(3) のような外在化を予測してしまう。

(3) $*Bill, met\ yesterday.$

これに対してボックス理論では (4) のような構造を考える。

(4) $\{C, \{Bill_3, \{v^*P\} \boxed{Bill_2}, \{met\} Bill_1\} \}$

² 「ボックス」がそもそも何であるかについて、Chomsky (2023) は操作的に定義するのみで、明確な定義はまだ与えられていない。

目的語としてEMされた $Bill_1$ は、 v^*P の先端にIMされ ($Bill_2$)、□で示されるようにボックスに投入される。ボックス内の要素は、仮定によってCからアクセスを受け、外在化によってC位置で発音される。この枠組みでは、ひとつのフェイズでEMされるべきものを一通り先に組み合わせるから、IMが適用される。主語に相当する要素は外項 (External Argument: EA) として、IMが適用されてフェイズが完成されたあと、すなわちフェイズの外に併合される。これによって、たとえば (4) では $Bill_3$ は $Bill_2$ をc統御しておりコピー形成の適用対象になるように思われるが (その点で (2) は同じであるが)、この関係はフェイズ境界によって阻まれるため、コピー形成がフェイズごとに適用される、という一般的な仮定によって、コピー関係は認められない³。結果として、(1) の外在化が適切に予測できる。

この枠組みは、それまで連続循環的移動の反映と考えられてきた様々な現象を、構造構築の過程では説明しないことを意味しており、その妥当性は今後慎重に検証される必要がある。しかし、Chomsky (2021) が提案したコピー形成が、併合操作とは独立した解釈プロセスであるとしたことで生じた弊害を除去するうえでは、効果的な枠組みであるとも考えられる。この論文では、コピー形成のために洗練された枠組みにおいて、束縛現象がどのように捉えられるかを検討する。

3. 日本語における再帰代名詞：主語指向性と長距離性

Katada (1993) は、日本語の再帰代名詞「自分」が、人称・数・文法的性の情報を担う ϕ 素性の値が指定されていないために「演算子」性を有しており、LF移動に従うと論じた。(5) の対比が示すように、「自分」は、いわゆる主語指向性を有しており、先行詞に主語しかとることができない。

- (5) a. ビル_iが [_{VP} マイク_jに 自分_{i/j}のことを話し]た。
b. ビル_iが [_{VP} マイク_jに 彼自身_{i/j}のことを話し]た。

Katada (1993) の分析では、「自分」は、(6) に示すように、LF移動によってVP

³ この解決法は (2) には適用されない。連続循環的移動 (より厳密には、連続循環的「内的併合」) を前提とする枠組みでは、いずれにしてもフェイズ境界を超えた $Bill_4$ との間にコピー関係を認める必要があるためである。

に付加して先行詞の解釈を得る。

(6) ビルが_[VP] 自分_[VP] マイクに 自分_[VP]の_[VP]ことを 話し_[VP]]た。

このため、LFにおける「自分」の位置よりも低い「マイク」を先行詞に取ることができない。これに対して、「彼自身」は ϕ 素性の値による「演算子」性を有していないため、移動が関わらないと説明している。

再帰代名詞「自分」は、節を超えて先行詞を取れるという意味で長距離性も有しており、その点で、主語指向性を有する点では同じ「自分自身」とも対比を成している。(7)の例では、従属節中の「自分」は主節の「ジョン」を先行詞に取ることができるが、「自分自身」はこれができないことがわかる。

- (7) a. ジョン_iが [ビル_jが マイク_kに 自分_{i/j/k}の_{i/j/k}ことを 話したと] 言った。
b. ジョン_iが [ビル_jが マイク_kに 自分自身_{i/j/k}の_{i/j/k}ことを 話したと] 言った。

Katada (1993) は、いずれの場合も「自分」についてLF移動を仮定するが、「自分自身」の場合は、連続循環的に適用されないというLF移動の性質によって、この結果生じる痕跡が適正統率されず、節を超えて先行詞を取ることができない、という分析を与えている。

このような分析は、統率をはじめ、いわゆるGB理論固有の理論的概念に多くを依存しているため、前の節で概観したボックス理論の枠組みでそのまま採用するわけにはいかない。次の節では、Katada (1993) による「演算子」性の仮定を引き継いで、ボックス理論の枠組みで分析を与える。

4. ボックス理論における日本語再帰代名詞の分析

Katada (1993) による提案で最も重要なのは、 ϕ 素性の値が未指定であることと移動（「演算子」性）とを関連付けたことである。前の節で対比した他の代名詞を合わせて、 ϕ 素性の観点からまとめると、以下のようになるだろう。

- (8) 日本語 (再帰) 代名詞の構成
a. 「自分」は値のない ϕ 素性を有し、演算子として機能する。(Katada 1993)
b. 「彼」は値の指定された ϕ 素性を有し、演算子として機能しない。

c. 「自身」は値のない ϕ 素性を有するが、演算子として機能しない。

Katada (1993) が ϕ 素性について「自分」と対比したのは「彼自身」だが、「自身」自体が再帰代名詞的であり、「自分」と複合して「自分自身」も形成するため、 ϕ 素性の構成については「彼」だけで考える必要がある。とはいえ、「彼」が ϕ 素性において「3人称・単数・男性」の値を有しているのは明らかであるため、(8b)のように仮定する。

「自身」はどうだろうか。先行詞に様々な名詞句を取り得ることを踏まえれば、 ϕ 素性において値を有していないと考えるのが自然である。しかし、「自分」と決定的に違うのが長距離性を有していない点であり、それゆえに「演算子」性を有しないと考えざるを得ない。このため(8c)のように仮定する⁴。

このような語彙的仮定のもとで、再帰代名詞を含む文の派生を順に考えてみよう。間接目的語を含む二重目的語構文の構造については深く立ち入らないが、最も単純な形として「自分」のIMに先行して *P 内のEMで構築されるものとする。なお、構造中でIOは間接目的語 (Indirect Object) を指す。(9b)は「自分」を含む文の構造を示している。

(9) 「自分」の主語指向性

- a. ビル_iがマイク_jに自分_{i/j}のことを話した。
- b. {C, {EA, { v^*P [自分₂], {IO, { v^* , 自分₁}}}}}

「自分」はフェイズの先端に移動するため、これを c 統御する要素のみが先行詞として束縛できると考えれば、先行詞になり得るのはEAのみである。

これに対して、「彼自身」は移動を含まないため、(10)のように分析できる。

(10) 「彼自身」の無指向性

- a. ビル_iがマイク_jに彼自身_{i/j}のことを話した。
- b. {C, {EA, {IO, { v^* , 彼自身}}}}

⁴ このことには独立した正当化が必要である。考えられることとしては、「自身」が再帰化述語の名詞として、「自分」や「彼」「彼女」など(あるいは「学生」「花子」「太郎」などのあらゆる名詞)をその項に取る構造を成している可能性である。多くの場合、「自身」の ϕ 素性は、それが項に取る名詞の値によって満たされるが、「自分」を項にとっても ϕ 素性の値は依然として満たされないため、「自分」は演算子としてフェイズ先端に移動するが、ラベルの必要性から、「自身」が動くことはできないと考える。

(10b) では、EAとIOのどちらもが「彼自身」よりも構造的に高いため、いずれも先行詞になれる⁵。

それでは長距離性はどうか。(11)の構造で考えてみよう。

(11) 「自分」の長距離性

- a. ジョン_iが [ビル_jが_s マイク_kに 自分_{i/j/k}のことを話したと] 言った。
- b. {C, {EA_M, {v*P IO, {v*, {CP C, {EA_E, {v*P 自分₂, {IO, {v*, 自分₁}}}}}}}}}}}

まず「自分」がもっとも深いv*Pの先端でボックスに投入されるが、この情報はそれ以降のフェイズ主要部からアクセスを受けて解釈されると考えると、いくつかの問題が生じる。まず従属節のCで解釈されるとすると、最も近い先行詞の候補は主節に生じうるIOだが、この先行詞は排除されねばならない。さらに、主節のv*で解釈されるとしても同様で、主節のIOを最も近い先行詞の候補として予測してしまう。そうなると「自分」は、節を超えたときには主語指向性がないことになってしまいかねないが、実際にはそうでないため、これらの可能性を排除する必要がある。

このため、フェイズ主要部v*の問題に関しては、以下を規定する。

(8) 位相の先端にある要素同士では、c統御配置(束縛関係)は決まらない。

そもそも単文の場合でも「自分」がv*Pの先端にIMされた時点では先行詞関係は決まらず、EAはv*Pフェイズの外側にあると考えるため、この束縛関係が決まるのはCPフェイズにおいてと考えるのが妥当である。複文の場合に、主節のv*がボックス内の「自分」にアクセスして解釈するときに、同じフェイズ内にEMされた要素はフェイズ主要部より高いと考える理由が何かあるのだと、ここでは考える。この仮定は、二重目的語構文のより適切な分析を採用することで、より自然な説明に置き換えられるかもしれない。

フェイズ主要部Cの問題に関しては、ボックスにアクセスできる情報が相対化されている可能性を指摘しておきたい。すなわち、v*のフェイズ主要部によっ

⁵ この場合、英語の *himself* について Hornstein (2001) などが提案する移動分析をこの枠組みに適用すると、*him*(=*John*)+*self*と分解される *him* が v*P フェイズ先端にIMされると考えることになり、英語の再帰代名詞において主語指向性を誤って予測してしまうため、妥当な分析とは考えられない (cf. 小町 (2022))。

てアクセス可能な情報と、Cのフェイズ主要部によってアクセス可能な情報は異なる、という可能性である。このことは、たとえば、ドイツ語のある方言や、英語を母語として獲得する幼児の「誤り」などにおいて、*wh*句が連続循環的に発音され得る観察があるが (Thornton 1990)、*wh*句が発音される場所は、CP指定部であって v^*P 指定部ではないことによっても支持される。

それでは、「自分自身」が長距離性を有さないことはどのように説明できるだろうか。(12)の構造で考えてみよう。

(12) 「自分自身」の局所性

- a. ジョン_iが [ビル_jが マイク_kに 自分自身_{?i/j/*k}のことを話したと] 言った。
- b. {C, {EA_M, { v^*P IO, { v^* }, {CP [C], {EA_E, { v^*P [自分₂], {IO, { v^* , {自分₁, 自身}}}}}}}}}}}

先述の通り、「自分自身」は「自分」と「自身」との複合語として成立しているが、いずれの ϕ 素性も値が指定されておらず、「自分」のみがフェイズの先端に移動する。この基本的な構造において、「自分」と「自身」それぞれが先行詞に束縛されねばならない。これを以下のように規定しよう。

(13) 「自分自身」の束縛条件：

「自分自身」では ϕ 素性付値のため、「自分」と「自身」それぞれが束縛されねばならない。

この仮定に基づくと、「自分」が長距離の先行詞を取れるのは先に見た通りだが、「自身」が先行詞を取れる範囲は広がらないため、「自分自身」として先行詞を取れる範囲は、結局のところ「自身」の領域内に限られ、長距離性を示さないことが導かれる。

以上見てきたように、日本語の束縛現象をボックス理論で捉えるためには、いくつかの補助的な仮定が必要である。

5. まとめ

本論文では、Chomsky (2023) が提示した新しい理論的枠組みであるボックス理論にもとづいて、多様な統語的振る舞いを示す日本語の再帰代名詞の分析を試みた。その結果として、ボックス理論において明確にするべき論点をいくつ

かあぶりだすことができた。説明としての信憑性を増すためには、これらの論点についてさらに探究する必要がある。

参考文献

- Chomsky, N. 2021. Minimalism: Where are We Now, and Where Can We Hope to Go. *Gengo Kenkyu* 160, 1-41.
- Chomsky, N. 2023. The Minimal Creed and SMT. Ms.
- Hornstein, N. 2001. *Move! A Minimalist Theory of Construal*. Oxford: Blackwell.
- Katada, F. 1993. The LF Representation of Anaphors. *Linguistic Inquiry* 22. 287-313.
- 小町将之. 2022. 「コピー形成にもとづく束縛関係の分析試論」『人文論集』（静岡大学人文社会科学部）73巻1号, 25-37.
- Thornton, R. 1990. *Adventures in Long-Distance Moving: The Acquisition of Complex Wh-Questions*. Doctoral Dissertation, University of Connecticut.